



願はくは花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ

さいぎょう
西行法師

花の季節になると、我が人生に「もしも」があったとしたら、と来し方を振り返りながら、行く末を思いやる時があります。

そういえば、英語の人生 (Life) には、もしもの (if) があります。(人生) には (もしも...) が隠れているということでしょうか。

もしも (if) 親が、あとしばしの寿命を授かっていたら...と考えながらお祈りする彼岸の頃です。

北国では雪を払いのけるために、花とともにスコップを抱えて墓参りをする様子が紹介されています。3月とは名ばかりで、冷たい風の中で命を授けてくれた親を偲ぶ春の彼岸ならではの光景です。

生まれてこの方、ずいぶんたくさん言葉を書い覚えてきたつもりですが、墓前に立つといつも、「ありがとう」と「ごめんない」の言葉だけしか浮かんでこないのは、

馬齢を重ねただけではないようです。

さて、自分を肯定できない人間は、他人も肯定できない、と作家の五木寛之さんは言っています。自分を認め、励まし、そして自分自身を喜ばせること。そこから生きる新たな希望が湧いてきます。

自分は社会で必要とされていると肯定できた時、自然に人々と協力することができます。自らの価値を信じることも、他人との関係を築く基本になるといふことになります。

桜の季節。日本人にとって桜は特別な存在です。中世以降、花と言えば桜を指しました。花の下で釈迦入滅の日「きさらぎの望月(旧2月15日)」に死にたいと詠んだ西行法師は、願い通りその翌日に没したと言われています。

松尾芭蕉は「桜の名所吉野の山で3日間も花を眺めながら、感極まって一句もできない

かった」と『笈の小文』に記しています。絶景の前に立ち尽くす芭蕉の姿が目につかんです。

市内にも桜の名所はたくさんありますが、自然界の異変は桜にも及んでいます。本市でも、開花の時期は早まりつつあるように思いますが、例年、全国でトップを切つて開花するのは高知市です。

昔の記憶をたどれば、満開の桜と重なるのは入学式でした。しかし、今はどうでしょう。卒業式のピークの頃に咲く桜、子どもたちの桜の思い出は、今後、卒業式とともに刻まれていくのでしょうか。



指宿市長
とよめつお
豊留悦男